

京都造形芸術大学大学院学位授与式・芸術学部卒業式式辞

2016年3月19日

京都造形芸術大学学長 尾池和夫

京都造形芸術大学博士の称号を授与された芸術専攻（博士課程）7名の皆さん、京都造形芸術大学修士の学位を得られた、芸術文化研究専攻（修士課程）および芸術制作専攻（修士課程）、合計73名の皆さん、学士の学位を得られた芸術学部13学科の合計691名の皆さん、まことにおめでとうございます。ご列席の学校法人瓜生山学園役員、副学長、研究科長、学部長、各専攻長、各学科長、センター長、教職員とともに、学位を受けられたことをここからお慶び申し上げます。ご家族の皆さま、ほんとうにおめでとうございます。

卒業・修了展を見に来られた方は、17000名ほどになりました。蒼山会の方々の見学会も、すぐ申し込みがいっぱいになりました。作品の前に多くの作者がいて積極的に説明してくれました。学科長をはじめ教員もたくさん現場にいて議論に加わってくれました。一般の人たちも熱心に見ていました。また、入学予定の方とその家族が何人も声をかけてくれました。作品の前でのさまざまのやりとりが、何より私にとって楽しいことでした。

2014年度の入学式でも話しましたが、皆さんの多くはいわゆるゆとり教育による初等中等教育で育った方たちです。ゆとり教育に対して批判する企業人が多く、2011年度からの学習指導要領では、ゆとり教育でも詰め込み教育でもなく、「生きる力をはぐくむ教育」となっていますが、本学の理念に照らしても、ゆとり教育世代の学生さんたちが芸術系大学の学生として、すばらしい人材として育てくれたと、私は確信しています。マンガ学科マンガコースの打越愛梨さんの作品は、このゆとり教育をテーマにしたみごとな作品でした。皆さん方の世代のすばらしい特長を発揮して、卒業後も大いにのびのびと活躍してほしいと思っています。

博士の学位を得られた李宣周（イツソンジュ）さんの論文題目は、「朝鮮半島における漆器下地材料の変遷に関する研究」です。主査は岡田文男教授です。この論文は、韓国の朝鮮時代における漆器製作技法について、保存科学的手法により、下地の変遷を解明し、その結果を漆器の保存修復と復元制作に応用しようとしたものです。論文の第一部は朝鮮時代の螺鈿漆器の科学分析、第二部は朝鮮時代の螺鈿漆器の保存修復と復元制作を論じたものです。朝鮮時代における螺鈿漆器の下地が骨粉を主体にしたものであることを指摘して、韓国の漆芸が中国の影響を受けながらも独自の発達を遂げたことを明らかにしたことがこの論文の大きな成果の一つです。また第二部では、実験を通して朝鮮時代の下地の骨粉の色調を再現したこと、さらに下地と相性の良い金属線の接着方法を発見したことなどが、第一部の成果を十分に反映したものとして高く評価されました。

武藤夕佳里さんの論文題目は、「並河靖之（なみかわやすゆき）の七宝業 — 技法と製作環境」です。主査は中村利則教授です。この論文は近代京都の七宝家として世界に名を馳せた並河靖之に焦点をあて、その技術的特徴と生業の実態を、豊富な資料、とりわけ「並河靖之七宝資料」および「並河家文書」を丹念に分析することによって明らかにしたものです。技術的のみならず、工芸史的、さらには文化史的な、学際的視角を有している点が高く評価されました。さらに、並河七宝の高度な芸術的創造性を、製作環境と一体となった文化として捉える視点はきわめて独創的であり、七宝研究に新たな地平を拓くものと、高く評価されました。

大学院修士課程の品川美香さんの作品「How to be Good」の強烈な印象は、今でも私の目に焼き付いています。

学部の卒業作品で印象に残った作品を挙げてみたいと思います。美術工芸学科総合造形コースの栗栖仁美さんの作品は「YORO I」です。女性を包むかわいい鎧を作ったといわれました。環境デザイン学科建築コースの加藤采（かとうあや）さんは、住宅が集まって城を築いているような空間を構築しました。情報デザイン学科映像メディアコースの水野開斗さんは、映像の世界での学ぶことと教えることの課題をとりあげた作品を生み出しました。

舞台芸術学科の展示会場である studio21 では、その場にいた俳優さんたちに一場面を実際に演じていただいた感激しました。歴史遺産学科文化財保存修復コースの海津由布子（かいずゆふこ）さんは下鴨社家の「鴨脚家旧蔵虫籠関係史料」によって竹虫籠を復元しました。皇室に献上されていた虫籠は重さ5グラムだそうです。現存しないこの虫籠を史料をもとに再現したもので、作品は下鴨神社に奉納されました。文芸表現学科では自作の詩を朗読して頂いてたいへん感銘を受けました。映画学科では『お姉ちゃんは鯨』監督・脚本村上由季さんの、隠岐の海士町で撮影された作品を見ました。すでに海士町でも上映会を開催されたと聞いています。

今回は、フジテレビでも全国放送され、また、NHK 総合（関西地区）の「学校再発見バラエティー あほやねん！すきやねん！」には、3月5日（土）のスタジオに、長原聡磨さん（プロダクトデザイン学科）、松田大輝さん（プロダクトデザイン学科）、荒井里菜子さん（空間演出デザイン学科）たちも作品持参で登場しました。新聞記事でも、虫籠の奉納など、多くが取り上げられました。

今回を含めて、京都造形芸術大学で学位を得た方は、現在までに、博士 37 名、修士 890 名、学士 9758 名になりました。皆さんが世界の各地で活動しています。進学する方も、社会に出ていかれる方も、心身の健康に気をつけてご活躍くださるようお願いしています。

皆さんには、藝術立国の理念への理解を深め、それを後輩に伝えてほしいと願っています。20 年後、あるいは 40 年後、この学園を皆さんが訪れたときにも「藝術立国之碑」が、

大学の理念を伝えているはずですが。その理念を今日の式典に参列された皆さんの力で、世界に伝えていってほしいと願って、私の式辞といたします。

博士、修士、学士の学位を得られた皆さん、まことにおめでとうございます。
ありがとうございました。